

令和 3 年度

福祉作文コンクール入選作文集

令和 3 年度
福祉作文コンクール入選作文集

令和 3 年 11 月
社会福祉法人久慈市社会福祉協議会

〒028-0014
久慈市旭町 7-127-3
TEL 0194-53-3380
FAX 0194-52-7715

社会福祉法人 久慈市社会福祉協議会

この作文集は共同募金助成金の一部をあてて作成しました。

目次

小学校低学年

佳作 もっと上手になりたい 長内小学校 二年 山口れい 1

小学校高学年

最優秀作 わたしのひいおばあちゃんについて 長内小学校 六年 四役麗奈 3
優秀作 コロナの終息に向けて 長内小学校 六年 大石朱莉 4
佳作 みんなが安心できる街 大川目小学校 四年 藤森日彩 5
佳作 大切なひいおばあちゃん 長内小学校 四年 外野凜花 6

中 学 校

最優秀作	ある夏の日、僕は考えた	久慈中学校	二年	少路陽	7
優秀作	母と私の夢	長内中学校	二年	久保田詩乃	8
佳 作	公平な未来	長内中学校	二年	勝田水葵	10
佳 作	いじめ・差別について	大川目中学校	二年	三上桜	11
佳 作	障害についての理解を深めるために	久慈中学校	二年	繁名真穂	13

高 等 学 校

最優秀作	普通がない社会	久慈東高校	二年	中家優芽	15
優秀作	ピースができなくても	久慈東高校	二年	滝澤里菜	16
佳 作	「ごめんなさい」を「ありがとう」に	久慈東高校	二年	松坂凜	18

審査委員の感想

応募者・入選者

実施要項

審査委員

小学校低学年の部

*佳

作

もつと上手になりたい

長内小学校 二年

山口 れい

校長先生が、みんなに聞きました。

「オリンピックより、パラリンピックの方がしゅ目が多いのは、なぜだと思いますか。」

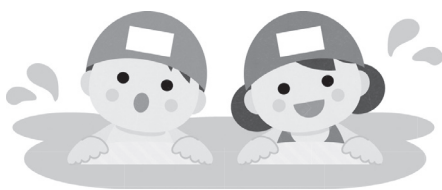
わたしは、おとうさんとおかあさんから聞いていたのでパラリンピックのことは知っていました。手や足がない人とか、目が見えない人がやるきょうぎだと思っていました。おかあさんに、手や足がない人がどうやって走るのかを聞いたら、きかいみたいなものをつけてやることを教えてくれました。でも、なぜしゅ目が多いのかは、分かりませんでした。

もし、手や足がなかったら、ごはんを食べたり、お風呂に入ったたりするのも大へんだと思います。目が見えなかったら、歩くことや文字を書くこともむずかしいはずです。じ分がそうならこわいし、かなしくなると思います。

でも、パラリンピックを見たら、手や足がない人も、目が見えない人もみんながんばってスポーツをしていました。そして、よいけつかを出していました。「わたしは、できる」や、「すきだから、がんばる」と、一日一日をむだにしないで、がんばってれんしゅうしていました。きかいをつけても、わたし

よりはやく走っていたし、車いすでテニスをしている人もいました。けがやびょう気をした人が、けがやびょう気をしていない人みたいに、スポーツをしていました。けがやびょう気をしてても、何でもできるんだなと思いました。

わたしは、けがもびょう気もしていないけれど、バタフライで上手におよぐことができません。がんばっても思いどおりできないことがあるのは、パラリンピックせん手と同じだと思いました。でも、あきらめないでれんしゅうして、できるようになりたいと思う気もちも同じです。スイミング教しつに行きたくないこともあるけれど、がんばってれんしゅうして、できるようになりたいです。





小学校高学年の部

* 最優秀作

* 優秀作

* 佳作

最優秀作

わたしのひいおばあちゃんについて

長内小学校 六年

四^{よつ}役^{やく}麗^れ奈^な

わたしは、四年生の時に障がい者の体験をしたり、認知症についての学習をしたりしました。その時に、障がい者や認知症の人、それを支える家族の大変さを感じました。

五年生の終わりごろ、四年生で学んだ、障がい者や認知症の学習について少し忘れかけていたときのことです。ひいおばあちゃんが突然お腹が痛くなり、トイレでたおれてしまったことがあります。わたしのひいおばあちゃんは、障がい者ではありませんが、糖尿病などたくさん病気をもっています。わたしは、家に帰り、お母さんからこのことを聞きました。突然のこと、とてもおどろきました。ひいおばあちゃんが亡くなってしまうのではないかということも考えてしまい、こわくなりました。

何日か入院をして、やっと元気になって帰ってきました。でも、ときどきお腹が痛くなり、痛そうなところを見ていると、「本当に、大丈夫かな。」

と思いました。何度も痛そうにしているところを見てきたので、頭の中が真っ白になってしまいそうなきもちもあります。具合が悪いときなどは、いつもとちがうごはんが出ます。わたし

は、ときどきひいおばあちゃんにご飯を出してあげます。すると、うれしそうに顔をしながら、

「ありがとうございます。」

と言ってくれます。そして、

「また、次もよろしくお願いします。」

と笑顔で言ってくれるので、わたしまでうれしくなります。

今は、元気になり、畑や家の草取り、ほうきで地面を平らにするような仕事をしています。ある日、ひいおばあちゃんがわたしに、

「ご飯食べたか。」

とたずねてきました。

「わたしは、食べたよ。」

と答えましたが、またしばらくすると、

「ご飯食べたか。」

とたずねてきました。わたしはびっくりしました。そして、もしかしら認知症のようなものが始まったのかと思いました。もし認知症だったら、何度も同じことを言われていても、話相手になつてあげれば良いと考えています。もっと認知症の症状が進み、物忘れが激しくなってしまうと、助け合っていくたいです。

認知症や他の様々な病気は、とても大変な思いをしている人がいると思いました。でも、何かしてあげたときにひいおばあちゃんがうれしそうにしてくれることは、わたしにとって大きな勇気になりました。これからもたくさん苦勞があると思う

ので、できる限りお手伝いをしたり、できることを考えたりしていきたく思います。そして、ひいおばあちゃんと過ごす一日日を大切に生活していきたくいです。

優秀作

コロナの終息に向けて

長内小学校 六年

大石朱莉

二年前のこと。中国で未知のウイルスが発見されました。そのウイルスは世界中で注目され、ニュースになりました。当時、わたしはこんな凶暴なウイルスだと思わなかったと思います。今では、人々を苦しませるモンスターのように、多くの人を感染させていきます。わたしは、自分が感染したり、家族が感染したりすることを考えると、とてもこわいです。また、コロナの流行によって多くの人が仕事を失い、世界中が貧困状態になるのではないかと思うと、とてもおそろしいです。

病院では、入院できる人の数が限られていて、商売している人は、来てくれるお客さんが少なくなり、閉店してしまうところがたくさんあります。わたしは、どうすれば感染拡大がおさまるのか考えてみました。

まず、みんながテレワークをすればいいのではないかと考えました。ですが、テレワークをしようと思ってもできない仕事もあります。ですので、この考えは難しいと思いました。次に、テイクアウトをできる店を増やすのはどうかないました。ですが、これも難しいと思いました。テイクアウトをするには、そのための容器が必要です。お客さんが少なくないり、売上が減っている中で、新たに容器を買うのは厳しいと思います。

わたしは、しばらく考えていました。どうすればいいのだろうと、頭をかかえました。その時、一つのいいアイデアが思い浮かびました。それは、自分の不安なところや、こうしてほしいというお願いを、そのままぶつけるという取り組みです。不安は、そのままかえこんでしまうとストレスになってしまいます。ですので、その不安な気持ちをぶつけられるよう、こうしてほしいというものをば集めるのです。同じ思いの人と出会うことで、安心する人もいます。さらに、他の人の思いから、新たな取り組みが生まれるかもしれません。このような思いを分かち合って、さらに新しいものを生み出すということとは、「みんなで」コロナを落ち着かせるといことにつながると思います。この「みんなで」というキーワードを大切にしたいです。安心して取り組めるようなものが増えてほしいと思います。

コロナの終息に向け、一人や二人が真剣に取り組むだけでは、何も変わりません。コロナが流行する前の、元のような世

の中にする、未来を変えるのは、世界のみんなです。まず、基本的な感染対策として、マスクの着用や手洗いがいい、消毒などに意欲的に取り組むことが大事だと思います。さらに、三密をさける、ステーションホームをするなど、わたしも感染拡大を防止するためにできることをがんばっていきたいです。そして、コロナが終息するのに役立てるようにしたいです。

佳作

みんなが安心できる街

大川目小学校 四年

藤^{ふじ}森^{もり}日^ひ彩^{いろ}

わたしは、そう合の学習で「やさしい街を作ろう」をテーマに福祉について学習しています。その中で、車いすの人の大変さについて調べたいと思いました。わたしのひいおばあちゃんが車いすを使っているからです。わたしは始め、車いすは大変そうだしかわいそうだなと思っていました。そこで、車いすの人がどんなことが大変か、私たちにできることはないか調べたいと思いました。

まず調べたことは、い動でこまっていることについてです。ひいおばあちゃんは車いすを使っている、階段を上ることがで

きないから大変だと言っていました。調べてみると、車いすはせまい道やだんさがあるとところやすべりやすい道などではい動が大変だとわかりました。通ることができない道がかぎられているのはとても大変です。できることは手伝いたいと思いました。

さらに、わたしは社会福祉体験で車いすに乗ったりおしたりする体験をしました。一番心に残ったことは、車いすをおしてみたときのことです。なぜかという、だんさがあるときのそのさの仕方が大変だったしむずかしかったからです。最初、「おすのはかんたんでしょ」と思っていました。ゆっくりおしたり注意しなければならぬことがたくさんありました。少しでもだんさがあると進めなかつたのですごくびっくりしました。持ち上げなければならぬので重かったです。おすときのポイントがたくさんあったので、注意しなければなりません。乗っている時もスピードが出るとこわかったです。「動くよ。」とか「とまるよ。」と声をかけてもらえると安心しました。ひいおばあちゃんのが持ちがわかつたような気がしました。家にも学校にも道にも、だんさはたくさんあります。車いすの人は、とてもくらしにくいのではないかと思います。これらの体験を通して、わたしは車いすの人を見かけたら、まずはやさしく声をかけたいと思います。わたしも車いすです活することになるかもしれないです。自分だけでやろうとしないで、周りに声をかけながら手伝いたいと思いました。そして、わたし

はこれからみんなが楽しく安心して笑顔でくらせる街にしていきたいです。そのために、車いすの人でも安心して通れるはばが広い道やでこぼこの道がないような街にしていきたいです。だんさがある所などはスロープを設置し、だれでも安心して移動できるようになればいいと思います。あと、みんなに車いすの人のこまっつていることを考えたり気もちを知ったりしてもらいたいです。そうすると、一人一人手伝ったり声をかけたりすることが当たり前になって、安心してくらせると思います。みんなが幸せにくらせるような街にしていきたいです。

佳作

大切なひいおばあちゃん

長内小学校 四年

外野の凜花

わたしのひいおばあちゃんは、とてもやさしいひいおばあちゃんです。わたしが一番やさしいと思った理由は、わたしが、悲しくなってしまう泣いた時、ひいおばあちゃんもいつしよに泣いてくれたからです。こんなに、わたしのことを思っているんだなあと思い、もつと泣いてしまいました。しかし、ひいおばあちゃんには、心ぞうの病気があります。それが悪化すると

胸が苦しくなります。それを見て、かわいそうと思う事しかできなかつた時、自分のことがすごくいやになりました。わたしは、何をすればよいか分からなくなってしまう、泣きたくなりました。今、ひいおばあちゃんは、病院に入院しています。ひいおばあちゃんが入院したことで、こうかいしたことがあります。それは、自分があのと時何もできなかったことです。なぜあのと時なにもできなかったのだろうとそんなことしか考えられませんでした。集中ちりよう室でかんごしさんにみてもらっているとき聞いた時は、とても心ばいになりました。毎日、ひいおばあちゃんのことしか考えられず、おじいちゃんとおばあちゃんに、ひいおばあちゃんの様子を聞きました。ひいおばあちゃんの体調が悪くなって初めて、もつと大切に思っであげていればよかつたと思いました。

わたしは、今回の経験を通して、高れい者や身近な人を大切に、やさしくせつしていくべきだと思いました。ふだん生活をしていると、身近な人にやさしくしようという気持ちにはなりません。しかし、身近な人がいなくなってしまうこともあります。すると、わたしのようこうかいします。こうかいしてからではおそいです。ですので身近な人や高れい者にはやさしくしてほしいです。

ひいおばあちゃんは今では、人工こきゆうきもとれてじゅんちようにかいふくしているそうです。家に帰ってきたら、たくさん話をして、たくさんお手伝いしたいです。

中
学
校
の
部

* 最
優
秀
作

* 優
秀
作

* 佳
作

ある夏の日、僕は考えた

久慈中学校二年

少路

ひかる

七月二十七日、僕のひいおばあちゃんは天国へ旅立った。僕たちひ孫をかわいがってくれる、花が大好きなひいおばあちゃんだった。

ひいおばあちゃんは、年をとって介護が必要となった時、自宅での介護を希望した。僕も同じ立場だったら、そう思うと思う。だって、住み慣れた自宅が一番良いに決まっている。母方のひいおばあちゃんだったので、おばあちゃんやおばさん、おじさん夫婦が交代で介護することになった。ここで出てくるのが、老老介護の問題だ。おばあちゃんたちだって、若くない。体力面、精神面において大変だったと思う。久しぶりにおばあちゃんに会った時、明らかにやせていた。疲れていたと思う。

僕は、

「やせた?。」

と、思わず聞いた。すると、おばあちゃんは視線をななめ下に落として、

「そうかな。ちよっとね。」

と、寂しそうに笑った。僕は、それ以上何も言えなかった。そして、情けないことに何も出来なかった。

ひいおばあちゃんが息を引き取った時、ほほ笑んだ顔でとても良い表情だったとみんなが言っていた。これはきっと、自宅で介護が出来て最後まで自宅で過ごせたからではないのかなと僕は思う。おばさんが教えてくれたのだが、ひいおばあちゃんは訪問看護と訪問介護のサービスを利用したそう。ケアマネージャーという方に相談して、力になってもらったと聞いた。看護士さんに様子を見てもらったり、介護のプロの方に入浴等の介護を手伝ってもらったりしたそう。

「仕事だったからというのはあるけれど、とても心強い存在だったよ。」

と、おばさんは目を細めて言っていた。

今回、ひいおばあちゃんは介護における支援サービスを利用して上手く介護してもらえることができた。本当に良かったと思う。でも、国では高齢化と核家族化が進んでおり、介護問題は社会全体の課題となっている。実際に、介護殺人や介護心中、ぎゃくたい等、悲惨な事件は次々と起こっている。どうすれば良いのか。現在、特に老老介護等に焦点を当てた行政のサポートは存在していないそう。しかし、少子高齢化がスピードを増していることへの対策として、「地域包括ケアシステムの構築」を厚生労働省は推進している。調べてみると、岩手県でも地域住民の心身の健康の保持及び生活の安定のために必要な援助を行うことにより、地域住民の保健医療の向上及び福祉の増進を包括的に支援することを目的として、地域包括支援センターが七十三か所設置されているということが分かった。ひ

いおばあちゃんが居た場所は、訪問看護や訪問介護を受けられるところだったから良かったけれど、もしかしたら地域によっては受けられない場所があるかもしれない。早く国の制度や、行政のサービスが整えられてほしいと願う。

今回思ったことは、ありきたりな言葉だけれど、人とのつながりが大事だということ。家族はもちろんのこと、まわりの人たちに助けられて自宅介護をすることが出来た。まだまだ僕は勉強不足だけれど、まず現状を知り社会全体で取り組まなければいけないと感じた。だからといって何が出来るのか、正直分からない。まわりの人に感謝すること、相手を思いやること、今の僕にとつて出来ることはそれくらいしかない。いつか一歩踏み出し、何か行動していききたいと思う夏だった。



優秀作

母と私の夢

長内中学校二年

久保田詩乃くぼた しの

母の将来の夢は、厚生労働省に入り、障害児が生きやすい社会を創ることでした。けれども、その夢を断念せざるを得なかった過去があります。

私の母は病気で、病名は、「全身性エリテマトーデス」。多くの研究が世界的に行われていますが、未だに原因不明の病気です。母の場合は特に症状が重く、前触れなく突然倒れてしまうことがあります。高校三年生の春に発症した母は、入院や治療のために大学進学を諦めました。普段の生活には支障がなく、幼い頃の私は母が病気であることを意識する機会はありませんでした。しかし、初めてはつきりと母の病気の重さを実感した出来事を、私は忘れることができません。

私が小学四年生の夏のことです。家族で小岩井農場に遊びに行きました。楽しく遊んだ後、ソフトクリームを食べようとお店の列に並んでいた時、母が突然倒れたのです。苦しそうな、険しい表情で倒れこみ、父の肩に手をかける母。それは、いつもの明るく優しい母の様子とは全く違っていたのです。その姿を見た瞬間、私は恐怖の感情に襲われました。景色がゆっくり進んでいき、呼吸をするのも忘れ、頭が真っ白になりました。

気付くと私は声を上げて泣いていました。ますます呼吸を荒くする母の姿を見て、本当に死んでしまうのではないかと思いましたが。

その時、母が

「大丈夫だから。泣かないで。」

と苦しみながら私に声をかけてくれました。私はその言葉にどれだけ安心したか分かりません。しかし、苦しんでいる人を前に何もできない無力さで涙が止まりませんでした。

その日、母はお店の別室で休憩し、徐々に回復しました。適切な処置のおかげで、夕方には車で帰ることができました。けれども、このことがあってから、目を瞑ると何度も何度も母の苦しむ姿が浮かんでくるようになったのです。私が何もできないまま、母はいつか死ぬのではないだろうか。そう考えると、今でも怖くて眠れない日があります。

一方、私の父は違います。その後も母は家で何度か倒れたことがありましたが、すぐに適切な処置ができます。なぜ素早く対処ができるのか。気になって、一度父に聞いたことがありません。

「深く考えたことはないよ。」父の返答に、私は驚きました。私でさえいろいろと考え悩むことがあるのに、ずっと母と一緒にいる父が何も考えていないとは思ってもみなかったからです。しかし、父は続けました。

「病気の人と病気でない人の違いは、ないと思うんだ。病気の人も普通の人として接すればいいと思うし、困っていたら助け

るのは、当たり前のことじゃないかな。」

その人が困っていることやできないことを手伝えれば、それでいい。自分にできることをすれば、それでいい。その通りだと思えました。もし私の友達が目の前で転びそうになったら、きっと私は助けることでしょう。同じように、父にとって母を助けることは「当たり前」で「普通」のことだったのです。そう考えた時に、なぜ父が焦らずに冷静に対処できるのか、分かっただよな気がしました。

時々、母が病気であることが可哀想だと言われることがあります。私はその言葉に違和感があります。母が病気であることも含めて、私にとっては「当たり前」で「普通」のことだからです。私は、病気の有無に関係なく、いつも明るくて思いやりのある母が自分の母で、本当に良かったと思います。

普通ではない人がいるのは普通だと、分かり合える社会にしていくこと。それが今では私の夢です。これから私は、自分がこれまで体験したことや考えてきたことを伝えていきます。より多くの人々が、幸せに生きられるようにするために。



公平な未来

長内中学校 二年

勝田水葵

ステイブンスジョンソン症候群。私がこの病気を発症したのは、小学二年生の時でした。感染症や薬剤などがきっかけで、発熱の他、体の皮膚や粘膜などに異常が発生する病気です。私の場合、口内炎ができたり顔に水ぶくれができたりしました。死亡することや後遺症が残る可能性もある病気であり、眼に症状がでると失明する場合もあるため、一日に何度も目薬を差したことを覚えています。他にもいろいろ治療を受けましたが、残念なことに、肝臓に後遺症が残ってしまいました。

小学三年生になると、より本格的な治療を受けるため、盛岡の病院に入院することになりました。小学三年生の私にとつて、それまで慣れ親しんできた小学校や友達と離れてしまうのは悲しいことでした。それでも病気を良くするために、近くの支援学校に通いながら治療をしました。

治療を受ければ、きっとよくなる。そう思って頑張りました。けれども、そうはいきませんでした。治療で飲んでいた薬に含まれていた成分が原因で、肝臓の疾患に加え、今度は骨粗しょう症になってしまったのです。冬には東京の病院に行き、生体肝移植を受け、母の肝臓を半分もらうことになりました。

こうすることで、拒絶反応があったものの、病状は何とか回復していきました。その後も辛い治療の日々が続きました。私の背骨は骨粗しょう症の影響でほぼ全部が潰れてしまい、小学三年生の半年間で身長が六センチも縮んでいました。そのためコルセットをつけて生活をしました。

久慈に戻ってからの私の病気は、少しずつ回復していききました。そして、小学六年生になるころには、運動ができないこと以外は他のみんなと同じように活動することができるようになりました。中学二年生になった今でも毎日薬を飲んでいますが、けれども、見た目は普通の人と一緒です。私は今、同級生のみんなと一緒に過ごしていることが嬉しいです。

こんな経験をした私だからこそ、言えることがあります。それは、みんなが幸せに生きるためには、どんな人にも公平な社会を創ることが大切だということです。そして、そのためにはそれぞれが自分にできることを精一杯することが大切なことで重要なことだということです。世界には、見た目では分かりにくくても、病気や、いろいろな事情を抱えている人達がいて一緒に生きています。そして、生きている人には、全員に同じように価値があるのです。もちろん病気や事情によってできないこともあります。しかし、一人ひとりが自分にできることをしっかりと果たすことで、他の人のできないことを補えるようになると思います。この考え方が、より良い社会にするために大切なのではないのでしょうか。

私も骨の病気のためにできないことがたくさんあります。け

れども肝臓を分けてくれた母や病院の先生をはじめ、関わってくれた全ての人のおかげで、今元気に生きています。その気持ちに応えたいと思い、自分のできる範囲で、徐々に運動するようになっていきます。私は時々、私以外みんな健康で、何一つ困ることもなく暮らしているような感覚に陥ることがあります。しかし、実際には病気やその他の事情で苦しんでいる人がいるということも、そのような人を支えている人がいることも知っています。

何度も生死をさまよった私は、他の人よりも内容の濃い人生を送ってきました。いつ具合が悪くなるかは、誰にも全く分かりません。しかし、分からないからこそ、誰よりも自分自身や周りの人の人生を大切に、幸せに生きたいと思っています。

佳
作

いじめ・差別について

大川目中学校 二年

三^み上^{かみ}

桜^{さくら}

「普通とは、いったい何なのだろうか。」

私は特に最近、この疑問をいただくことが多くなった。それは、社会全体が多様性について考えていこうとしていて、多く

のメディアで目にするようになったからということもあるが、一番の理由は、中学生になり様々な人たちと接する機会が増えたからだと思う。

だからこそ、私は自分なりに「普通」について考えることにした。まず、「普通」の言葉の意味を辞書で調べると、「世間一般に、どこでも、いつでも見られること」「正常であること」となどの意味らしい。ならば、肌の色がちがう、障害を持っているなどの人たちは、「普通」にあてはまらないのだろうか。私は、そうではないと考えた。なぜなら、肌の色が何色でも、それがその人にとつての「正常」であり、障害を持っていても「正常」だ。しかし、そのような人達がいじめで苦しんだり、差別でひどい扱いを受けるということは、よく耳にする話だ。

ならば「いじめ」や「差別」はどのような理由で起きてしまうのだろうか。私はそれが気になったので、調べてみることにした。いじめをしてしまう理由として、多くあがるのは、自分と異なる人が受け入れられないということにあるのだそうだ。自分と異なる人が受け入れられないことは、私もよくある。しかし、だからといっていじめや差別をすることは、してはいけないことだ。

そこで、私は、いじめや差別が起きないためにどうしたら良いか考えた。そして、私が思いついたことは、はじめにも言った「普通とはなんだろう」ということを一人一人が考えることだ。世界にはいろいろな人がいて、一人一人が異なるみため、

考え方を持っている。一人としてまったく同じ人はいない。そうすると、人間にとつての「普通」は本当はないのではないかと考えた。

確かに、自分とは異なる人を受け入れるのはとても難しいことだと思う。だが、「自分とちがうから」という理由で、その人に対して暴力をふるったり、傷つけるような態度をとったりすることは、決してしてはいけないことだ。そんなことをする前に、その人の気持ちになって考えてほしい。その人を受け入れられるように、まずは自分が努力してみてほしい。

そして、今、差別やいじめで悩んでいる人に対しては、あなたは決して悪くない、自分を責めずに、つらいときは信頼できるだれかに相談して、一人で悩まないでほしいと思う。

最後に、「普通って何なのだろう」という問いに対する私の答えを考えてみた。私が考える「普通」は、まわりと比べて変だ、というような、多数の人を表す言葉ではないと思う。一人一人違っていることこそが、「普通」だと考えた。また、私は、母と話していたときに、母が言った言葉がとても心に残っている。それは、

「多数は必ず正解というわけではない」

という言葉だ。確かに、私も自分の意見が少数派だと不安になり、つい多数に合わせてしまうことがある。しかし、多数が必ずしも正しいわけでもないし、少数が変だということも決していない。だからこそ、少数だとしても胸をはって生きていくことも必要だなと感じた。

これから私は、今よりもっとたくさんの人に出会おうだろう。

その出会いや、起きたできごとに対して、「この人のこんなところは受け入れられない」と思ったり、「自分はまわりと違う、おかしいのだろうか」と悩んだりすることがあるかもしれない。でも、そんな時でも「一人一人違っていいことが普通なんだ」ということをいつも心にとめておきたい。そして、この人の気持ちになって、少しでも受け入れる努力をしようと前向きに考えたり、自分が変だということはなく自分をはげましたりしていこうと思う。

また、母が言っていた言葉

「多数は必ず正解ではない」

という言葉思い出し、たとえ自分が少数派の意見を持っていても、自分の意見をまげずに、強い意志を持って生きていくように頑張りたい。

そして、いじめや差別を受ける人が、それから解放され、夢を叶えることができる社会になるように私もできることをしていきたい。

障害についての理解を深めるために

久慈中学校二年

繁名真穂

私には、二つ年上の兄がいます。兄は、「発達障害」という障害をもっています。「発達障害」とは、生まれつきの脳機能の発達の偏りによる障害です。ただ障害とだけ聞いただけで、「かわいそう」だとか、「不幸だ」と感じる人もいると思います。私も実際、兄のことをかわいそうだと思っていました。でも、今はかわいそうなんかじゃないと思えるようになってきました。

そのきっかけは、小学六年生の時に総合の学習の時間で聞いたある言葉です。障害を持つ人たちに障壁のない場を提供する活動を行っている「ハックの家」の方が、障害について知ってもらおうと、色々な話をしてくれました。その中で、私の心に響いたのが、

「障害を持つている人って、みんなからしたら、全く自分たちと違うなあ、と思うかもしれないけれど、私はそうは思わないよ。だって、人って顔や性格、好きなこと、嫌いなことが違うように、障害も一つの個性として考えればいいんじゃないかな。」

という言葉です。私はそれを聞いたとき、驚きもしたけど、嬉

しい気持ちの方が大きかったです。こんなに障害をポジティブに考えられる人がいるのだなあと思いました。

私は、周りに兄が障害者だということを隠してしまっていました。知られたらどう思われるだろう……。という不安があったからです。でも、もう隠すのはやめたいです。障害があろうとなかろうと、兄は私の大好きな兄だからです。

私は今、中学二年生です。当然、悩みやストレスといういつ爆発するか分からない爆弾を抱えています。それは、私に限らず、私の兄も同じです。私には相談できる相手がいて言葉で伝えることができます。でも、兄は自分の思いを相手に伝えることが難しいです。だから、私たち家族や、周りが気づけるようになりたいと思うし、いつか医学が進歩して兄と話せるようになったら嬉しいです。私も家族もみんな兄のことが大大好きです。

兄と共に暮らす中で、私には二つの夢が生まれました。一つは、特別支援学校の先生になることです。兄のように障害を持った人の気持ちを理解して、怒りたかったら怒ってもいいし、泣きたくなったら泣いてもいいよ。と伝えられるようになりたいです。もう一つの夢は、運転免許を取って、兄の大好きなドライブと一緒にいくことです。

現在、障害を持つ方は、肩身のせまい思いをしている場合が多くあります。でも、私はみんなが平等に、差別なくお互いに分かりあえる社会を目指したいです。まだ中学生で何もできないかもしれないけど、自分自身がもつと障害について知り、も

しそんな障害を持っている人がいたら助けてあげられるように
したいです。また、兄の障害を隠さずに、友達や周りに接し
て、障害への理解をもっと深められるようにしたいです。



高等学校の部

* 最優秀作

* 優秀作

* 佳作

普通がない社会

久慈東高校 二年

中^{なか}家^{いえ}優^ゆ芽^め

ある日テレビで見た障がい児を育てる母親の表情を私は忘れられません。とても不安そうに曇った表情を浮かべる方は一児の母親でその子どもは生まれつきの障がいにより、在宅での医療的ケアを必要とするいわゆる医療的ケア児と呼ばれる子どもでした。私はテレビで知った「医療的ケア児」という言葉がとても強く印象に残りました。そこで私は、障がい児とその家族について調べました。

私はなるべくリアルな様子が知れたら良いと思い、動画投稿サイトを見た所、障がいを持つ子どもを育てる親が投稿した動画を見つめました。まず私は、思っていた様子と全く違うことに驚きました。なぜなら、私はテレビで見た暗い感じの印象を持つていたのですが、私が見た動画では、全く暗い印象はなくむしろ障がいがあってもできる事をしようと前向きに考える家族ばかりでした。私達から見たら、障がいを持っていて大変だと思いかもしれないが、当時者やその家族からしたらそれがあたり前で普通の事なんだと感じました。また、私は障がい児と暮らす家族を見て「普通」とは人それぞれ違う。という事を、改めて感じました。

私は、「普通」という言葉があまり好きではありません。なぜなら、私は小学校の時からバレーボールをしているのですが、小・中学校の時にコーチから、「普通にやれば勝てる」と言われた事がありました。でも、今日は調子が悪かったらどうしようなどと考え、プレッシャーに感じる事もあったからです。他にも、高校受験の時、先生から「全国の受験生はこれくらい勉強している。」や「平均でこれくらい点数を取れている。」など言われました。でも私は、全国の皆が同じ学校を指しているわけではないのになぜ平均を強要するのかと思う事もありました。平均など数値化される普通はあくまで指標に過ぎないと私は思います。自分の中で掲げる目標や、ハードルの高さは人それぞれ違います。それは、障がいを持っていてもいなくても同じです。出来る事もあれば出来ない事もあります。つまり私達と変わらないのです。そこで私は、普通に囚れない社会になって欲しいです。今、多様化が進んでいますが、まだ日本は普通という考えが強い国だと思います。例えば同性の結婚が認められていないなどです。私は、そういった事を課題とし、解決する為に動く事が福祉だと考えます。なぜなら、福祉は人々の幸せを守る為、手助けする為にあると思うからです。社会は時の流れと共に変わります。そこで福祉も同じように時の流れと共に変わるべきだと思ふのです。今は高齢化が問題視されていたり、新型コロナウイルスの流行があります。なので、社会全体が福祉を知り、臨機応変に動く事ができれば社会はもっと良くなると思ふのです。その為に「普通」という考えを持

つ人が少しでも「人はそれぞれ違う」という考えに変わってほしいと思います。普通にこだわらない社会をつくるだけで、障がいを持つ人はもちろん、その家族や、不安を抱える人が生活しやすくなっていくと思います。耳がきこえない人にとつては音の無い世界が普通で、目が見えない人は見えない世界が普通です。私達は人それぞれ違う普通を互いに理解していくべきなのです。私がこの考えが出来るのは、障がいを持つ当事者や、その家族が障がいがあっても楽しく暮らしていたからです。そこから私は、誰かの普通に合わせるのではなく、互いの価値観を分かり合えたらそれで良いのだと思いました。人は大人になるにつれて周りを強く意識します。また、私達高校生が一番意識している自分や周りを見て思います。でも、その事でいじめが起き、ストレスを抱えてしまうのだと思います。

私は今「普通」は人それぞれなんだという考えになり、出来ない事や苦手な事を周りに合わせる為に頑張るのではなく、自分を高める為に頑張る事、自分の事も他人の事も否定的にとらえない事を日常生活から実践しています。そうする事で自分に自信が付き余裕も持てると思います。

福祉の仕事は優しい人が向いているといいますが、優しさの受け取り方も人によって違うと思います。なので私は相手を知り、自分の事も知ってもらい寄り添えるようになりたいです。それが出来るようになりいつか優しさとして相手に受け取ってもらおう事が今の私の目標です。私は将来福祉関係の仕事に就こうと考えています。一言に「福祉」と言っても色々な職種があ

るので難しいですが、自分のやってみたい事を明確にし決めたいと思います。最後に、もっと社会に福祉のわが広まり、互いを尊重し合う社会になっていってほしいと思いました。その為に福祉について、もっと考える社会になってほしいと思います。

優秀作

ピースができなくても

久慈東高校 二年

滝澤里菜

「はい、チーズ」

きつと、そういつた掛け声の後に撮られたであろう旅行中とみられる家族写真は、ガラパゴス携帯電話の画面を満面の笑みで埋め尽くしていた。カメラに向けられたいくつものピースサイン。しかし、一人の男の子は周りとは違った手の形をしていた。その男の子は、私に介護の有り方を教えてくれた人生の先輩だ。それと同時に、今は亡き親戚だ。先生とは、私が小学二年生の時に行われた曾祖父の葬式で会った。その後は一切会っておらず、生前に一度会ったきりだが、先生の事を私は忘れな

曾祖父の葬式が終わり、故人の家でくつろいでいた時、先生が、壁に飾られている何枚かの遺影を一つひとつ指差ししながら、

「あれが私の母親でね…」

と私に説明をしてくれた。その最中に、先生は、突然左足の義足を外し始めた。尚も続く説明。しかし、当時の私は義足の存在すら知らず、初めて足が外れるところを見たため、衝撃のあまり説明が全く頭に入ってこなかった。呆然としたまま先生の左足を見つめる私に気付き、先生は義足や自分自身の事について話してくれた。

まず、手について話してくれた。携帯電話を取り出し、一枚の写真を見せると、

「ほら、これ私なんだけど、ピースできてないでしょ。」

といい、右手が義手という人工的な手である事や、生まれつき右肘から下がなく、義手を着けてきた事を説明してくれた。左手がある事と、義手での生活が当たり前である事が相まって、あまり不自由だと感じた事は無いそう。

次に、足について話してくれた。中学生の時に交通事故に遭い、左足の膝から下を失ってしまい、義足という人工的な足を着けていると説明してくれた。

「生まれつき障がいがあったけど、まさか増えるなんて思わな
いでしょ。」

と、笑いながら話していたが、現実を受け入れる事やリハビリはとても辛かっただろうと、当時の私にも容易に想像する事が

できた。五十年以上も共に歩んできた義足に、今では愛着が湧いていると話していた。

そして、先生自身について話してくれた。先生は、義手での生活が不自由だと感じた事はないと言っていたが、両腕がある周りの人達に、僅かな憧れを抱いていたという。その理由は、いじめだ。先生は、小学生の頃に、周りの子から、右手で字を書くように言われ、からかわれたり、義手を壊されたり、様々な嫌がらせを受けたそう。

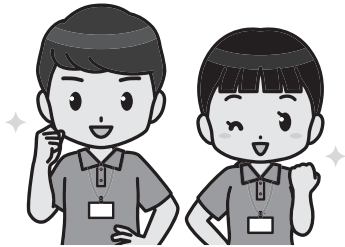
中学生になってからは差別やいじめがなくなり、左足や右手の代わりを率先して引き受けてくれる人達が増え、今でも周りには沢山の支えてくれる人がいると幸せそうに話していた。当時の私は、周りの支えている人達に強い憧れを抱いた。今の私もそうである。なぜなら、その人達は、先生の要望を聞かなくても、先生を助けたいという気持ちから、率先して動き、それが自己満足だけで終わらずに実際に助けになっているからだ。また、自立の機会を奪うように全てを行うのではなく、右手の指を曲げる必要がある時や、義足が着けられない時などに先生の能力を生かしながら支えていたからだ。私はこれを聞き、支援には、相手の事を把握し、受け容れるだけでなく、相手の有する能力を信じ、それを発揮する機会を奪わないように配慮する必要があるのだという事を学んだ。

私がこの時に学んだ事は、正に、二〇〇五年の介護保険法改正で、介護理念として追加された「自立支援」と「尊厳を支えるケア」にぴったりと当てはまるのではないだろうか。先生

も、その周りの人も、私も、一つひとつの行動が相手にとっての毎日を、社会を形成している。一人ひとりの価値観や受け止め方が一つひとつの行動に繋がっている。

いじめについて聞いた当時の私は、なぜ生まれ持った特徴等で差別が生まれてしまうのだろうかという疑問を感じた。それに、今の私はこう答える。人は、未知のものを恐れるため、自分を守るために未知のものやその所有者に対して攻撃してしまうのだと。また、それを無くすには、未知のものを既知のものにする必要がある、そのためには自分が動かなければならないのだと。障がいに限らず、相手への正しい理解がいじめの撲滅や、適切な介護に繋がると考える。

ピースができなくても、先生の周りには多くの支える人がいた。これから私は、先生の周りの人のような、本人の気持ちに寄り添う介護を提供するために努力を続ける。また、マイノリティな方についての情報を収集、発信し、社会全体での理解を深める取り組みをしていきたい。



佳作

「ごめんなさい」を「ありがとう」に

久慈東高校 二年

松坂 凜

「施設に入所すれば、全ての身の回りの世話をしてくれるし、ずっと寝ていられるし、楽なんだろうなあ。」「利用者の方に沢山感謝されるから、働く側はやりがいを感じるんだろうなあ。」私はこのような甘い考えを持っていました。

しかし、七日間の現場実習を通して、利用者の方の多くが発した言葉は、

「ごめんなさい。」

でした。私は、「ありがとう。」という言葉が出てくると勝手に思っていました。しかし、出てきたのは「ごめんなさい。」という言葉でした。私が、

「いいよ。大丈夫だよ。お手伝いさせてくれてありがとうね。」

と言うと、利用者の方はやっと、

「ありがとうございます。」

と話してくれました。私は何だかモヤモヤし、複雑な気持ちになりました。

七日間の実習を終え、私は、「どうしてありがとうではなく、ごめんなさいという言葉が出るのだろうか。」と考えまし

た。そこで、利用者の方の立場になり考えてみました。

時間になればご飯を食べることができます。お風呂にも入らせてもらうことができます。おやつも毎日食べることができずし、眠くなったら寝ることができます。毎日、穏やかに生活できます。今の私だったら、幸せに思うでしょう。

しかし、「なぜ」施設に入るのか考えてみてください。なぜ、お金を払ってまで介護施設に入るのか。それは、年を取り体が不自由になったから。認知症になったから。自分で何かすることが困難になったから。

私は、利用者の方が「ごめんなさい。」という言葉ばかり話す理由を理解しました。施設に入る理由が、家族が介護することと難しくなったからです。自分のことを自分で行うことが困難で、介護してもらわなければいけないのに、家族は介護することが困難。誰も、施設に入りたいとも、入らせたいとも思わないでしょう。できることなら、大切な家族と一緒に生活したいはず。やむを得ず、施設に入所しているのです。

そして、施設では、全く知らない介護者が介護することになります。

私も、このような状況に置かれたら、申し訳ないという気持ちになってしまいます。

実習中に、利用者の方が話してくださったことがあります。「昔は、ご飯も作っていたのよ。孫や子供の喜ぶ顔を見ることが楽しめで嬉しかったの。でも、今は体が思うように動かなくなってしまうって、立ち上がるのも大変になってしまったの。こ

んな体になってしまったって、娘にも、今お世話してくれる人にも、申し訳なくてね。たまに、家に帰りたくなるのだけど、娘にも迷惑かけられないし……。」

この話を聞いて、利用者の方は複雑な気持ちを持っているのだと思いました。

たとえば体が不自由になってしまったとしても、本人には「こうしたい」という思いがあります。

介護してくれるのはありがたいけど、本当は他人に裸を見られるのは恥ずかしい。料理の味付けは、自分好みにしたい。たまには、買い物をしたいし、外にお出かけしたい。子供や孫と話したい。

介護されているから、言えない本音が沢山あると思います。元の生活に戻りたいと思うことが、度々あると思います。

「今日は天気が良いから、散歩できたら、とつても楽しそう。」

窓の外を見ながら、寂しそうな顔をして、おっしゃった利用者の方がいました。

介護が必要になることは、悪いことではありません。私も、将来介護されるかもしれません。今後の介護のあり方として、私はこう考えます。「ごめんなさい。」が、「ありがとう。」

と言える介護。尊厳を守り、謝るのではなく感謝を伝えあえることができる介護。それができれば、今よりも少し、幸せになれるのではないのでしょうか。

審査委員の感想

審査委員長 門前雅紀

○講評（中学校の部）

「福祉」は全ての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことと本コンクールの実施要項に示されています。今回応募された十六編の作品すべてに、その思いが中学生らしい視点で表現され、たいへん感心しました。

なかでも今回最優秀に選んだ作品は、老老介護の実態を体験し、公共サポートの心強さを感じながらも、地域差のない行政サービスを願うものでした。結びとして、「勉強不足であっても、感謝と思いを忘れず、いつか一歩踏み出したい」とする前向きさが感じられる作品でした。タイトルがいい。「おっ、なにがあったんだ？」と興味を引きますね。

「福祉」を考えるきっかけはさまざまでした。日常生活やメディアの情報、障害、コロナ差別、ボランティア、いじめ、介護、病気、災害などの問題点に気づく感性には中学生らしい鋭さがありました。課題はここからです。自分との会話が必要です。今までの経験や資料をもとに、気づきに対する自分の考えを持ち、未来に向かう自らの生き方を載せてほしいのです。

「自分にしかわからないこと」を「誰もがわかるように表現すること」が作文の極意です。そこには、自分を見つめるという働きと同時に、ほかの人に読んでもらうというねらいがあります。もちろん、思いを正確に伝える言葉を選ぶこと、文章のわかりやすさ、多面的な見方、文章の構成、記述の丁寧さが求められてきます。相手に伝えるために私たちは勉強しているのです。幸せな世界のために、たくさん体験と豊かな文章表現を積み上げ、すべての人が幸せを感じられる社会を目指していきましょう。

副審査委員長 村上嘉郎

○講評（小学校低学年・小学校高学年の部・高等学校の部）

福祉作文コンクールは、思いやりの心や助け合いの心を養い、自分たちの生活や地域への理解と関心を高めることを目的として行われました。応募作品の傾向としては、日常生活の中で感じたことや体験したことを基に、高齢化や障害理解、多様化、家族愛、そしてコロナ禍に目を向けた作品が多く寄せられました。

小学校の部には九編の応募がありました。その中で最優秀に選んだ作品は、認知症を支える家族の大変さについて学んだものでした。曾祖母との関わりを通じた実体験と照し合せて考えを深め、認知症のことを理解した上で、曾祖母との関係を大切にして寄り添いたいとの結論は、家族への優しい気持ちが素直に表現され、認知症介護に対する自分の主張が明確に伝わる内容でした。

高等学校の部で最優秀に選んだ作品は、高校生が日常の素直な視点で多様性に目を向け、福祉のあり方と自分の生き方を考えたものでした。医療的ケア児とその家族の明るい様子を通して、「普通」や「平均」という意味に疑問をもち、考察していく過程でその捉え方が変化していく様子が伝わってきました。価値観は個々に違ってよいと言い切り、感じ方や考え方は人それぞれであることを大前提に、それを受け入れて認め合っていくことこそが福祉なのではないか、という結論を導き出しました。「広い視点で人や社会と関わって生きていく」という自分の決意も素直に表現されていて、希望を感じる内容でした。

この二編の作品に共通する評価は、「段落の構成が明確なこと」「自分の疑問や悩み、意見や主張がはっきり表現されていること」の2点でした。この2点を整理するだけで、伝えたいことが分かりやすく伝わる良い例と言えるでしょう。自分の考えを整理して表現していくことは、自分の生活を充実したものにしてくれます。これからも作文に取り組みながら表現方法を磨き、考察力を高めて欲しいと思います。

令和3年度福祉作文コンクール応募者・入選者

■小学校低学年の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	長内小学校	2	やまぐち 山口 れい	もっと上手になりたい	佳作

■小学校高学年の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	長内小学校	4	そと の りん か 外野 凜花	大切なひいおばあちゃん	佳作
2		4	たこうら ま の 田高良 茉希	パラリンピックを見て感じたこと	
3		6	おお いし あか り 大石 朱莉	コロナの終息に向けて	優秀作
4		6	よつ やく れ な 四役 麗奈	わたしのひいおばあちゃんについて	最優秀作
5	小久慈小学校	4	せ の ひ ま り 瀬野 陽茉莉	「幸せ」について	
6	大川目小学校	4	ふじ もり ひ いろ 藤森 日彩	みんなが安心できる街	佳作
7		4	しん でん ゆい 新田 唯	安心の街	
8		4	おお した さち こ 大下 幸子	私たちにできること	

■中学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	久慈中学校	1	中田有咲	福祉のこと	
2		2	繁名真穂	障害についての理解を深めるために	佳作
3		2	少路陽	ある夏の日、僕は考えた	最優秀作
4		3	大内田千優	経験したからこそ伝えられること	
5		3	ウィリアムズ・フィオナ	介助する人とされる人	審査委員会特別賞
6	長内中学校	2	勝田水葵	公平な未来	佳作
7		2	久保田詩乃	母と私の夢	優秀作
8		3	大倉美海	皆が関わり合う社会へ	審査委員会特別賞
9	大川目中学校	2	大沢うた	幸せを持つために	
10		2	小倉龍伸	いじめ	
11		2	野崎瑠	幸せな社会へ	
12		2	三上さくら	いじめ・差別について	佳作
13	三崎中学校	1	菊地凛香	みんなが平等に楽しく暮らすために	
14		2	坂本慎	コロナによる二次被害	
15		2	大向ひな菜	ボランティア活動を通して	
16		2	大久保あいら	コロナの終息を願う	

■高等学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	久慈東高等学校	2	滝澤里菜	ピースができなくても	優秀作
2		2	松坂凛	「ごめんなさい」を「ありがとう」に	佳作
3		2	中家優芽	普通がない社会	最優秀作

令和3年度福祉作文コンクール実施要項

1 趣 旨

次代を担う小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、福祉作文を通じて、思やりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮している地域への理解と関心を高めることを目的として福祉作文コンクールを実施する。

2 主 催

久慈市社会福祉協議会

3 後 援

久慈市教育委員会

4 募集内容

日常生活の中で感じたこと、考えたこと、体験したことなど。
※別添資料を参考にしてください。

5 応募資格

市内の小学校・中学校・高等学校に在籍している児童・生徒

6 応募方法

(1) 制限枚数（字数）

- ・400字詰原稿用紙を使用
- ・小学生低学年（1～3年生）2枚以内
- ・小学生高学年（4～6年生）2枚以上3枚以内
- ・中学生2枚以上4枚以内
- ・高校生5枚

(2) 応募数

各小学校10編以内、各中学校10編以内、各高等学校10編以内

(3) 応募先

久慈市社会福祉協議会 福祉作文コンクール係

〒028-0014 久慈市旭町7-127-3 TEL 53-3380

(4) 応募期間

令和3年9月15日（水）必着

7 審 査

主催者で設置する審査委員会で決定する。

最優秀作：各部門各1編 優秀作：各部門各1編 佳作：各部門各1編以上
審査委員会特別賞：全部門若干

8 入選発表

令和3年11月に入選者の在籍する学校長に通知する。

9 表彰

入選者へは、主催者より賞状を贈る。

10 その他

- (1) 応募作品は原則として返却しない。入選作品の著作権は主催者に帰属する。
- (2) 主催者において入選した作品をまとめた作文集を発行する。
- (3) 本事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施する。
- (4) 最優秀作受賞者に記念品（図書カード3,000円分）を贈る。
- (5) 優秀作受賞者に記念品（図書カード2,000円分）を贈る。
- (6) 佳作受賞者に記念品（図書カード1,000円分）を贈る。
- (7) 応募者に記念品（図書カード500円分）を贈る。

<指導にあたっての参考>

「福祉」の「福」も「祉」も幸せを意味しています。福祉というのは、すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことです。先生がたのご指導にあたっては、次のことがらなども参考にしてください。また、題名は統一させずに、個々の表現で書くようにご指導ください。

募集する具体的内容は

- ◇ すごく幸せな様子と、それがどのようにしてそうなったのか。
- ◇ 恵まれていない、満たされない方々の様子から考えたこと。その方々のために何をしたいか。何をしたいか。
- ◇ お年寄りや身体の不自由な方々について、考えたこと。したこと。したいと思うこと。
- ◇ 差別やいじめについて考えたこと。
- ◇ 戦争や紛争や災害で、幸せでなくなっている方々について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ 自然災害で体験したこと。考えたこと。
- ◇ 「福祉」について日ごろ考えていること。
- ◇ 社会問題（貧困や虐待、老老介護など）について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ コロナウイルス等社会情勢について感じたこと

では、その材料は、どこから見つけるのか？

- ◇ 家族のふれあいや、出来事の中から
- ◇ 学校や友達とのふれあいで体験したり、見たり聞いたりしたことの中から
- ◇ 近所で見聞きした出来事の中から
- ◇ 地域活動、体験活動、訪問活動、交流活動などに参加した体験の中から
- ◇ 読書体験の中から
- ◇ テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどで見聞きした中から

令和3年度福祉作文コンクール審査委員

職名	氏名	所属団体等
委員長	門前 雅紀	夏井中学校長
副委員長	村上 嘉郎	久慈拓陽支援学校長
委員	中野 善文	山形中学校長
委員	大槻 桐子	久慈中学校
委員	高屋敷 真喜子	久慈市ボランティア連絡協議会長
委員	古山 誠	久慈市福祉事務所社会福祉課長